

川面の エトランゼ

写真・文

津島修三

〔秋田市在住〕

山形県置賜地方は、こんにちへ東洋のアルカディア(桃源郷)と喧伝されている。これは、イギリス人の女性旅行家イザベラ・バードが明治時代に東北北海道を探訪した折、こゝを著書『日本奥地紀行』の中で実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディアである」と讃えたことに由来する。

バードは、明治11年のひと夏、東京を起点に、日光、新潟、米沢を経て、以後、ほぼ現在の国道13号、7号のルートに沿って北上し、青森から北海道にわたるのである。旅の途上で見聞した各地の風物や人々の暮らしぶりなどが外国人ならではの客観的な目で著書に克明に記され、それは今、明治期の日本の市井の様子を知る貴重な文献にもなっている。

バードは、院内峠を越えて秋田県に入るのだが、現在の大仙市神宮寺からは雄物川を船で下って秋田市(著書には久保田と記されている)に向かうことにする。

雄物川の名はもととは「御物川」であり、仙北三郡の貢物を舟で城下に運んだことに由来するように、この川はかつては物流の大動脈であった。北前船の時代には土崎湊で京や大阪ともつながり、雄物川と支流の玉川などには河港が大きな所だけでも30カ所ほどもあったのだとか。また昭和に入ってから、30年代まではポンポン蒸気船が茨島の浜と上流の集落を結んで人や物資の往来が盛んだったようだ。

その雄物川で、昨年12月から屋形船の運航が始まった。秋田市新屋の秋田大橋のたもとから国際ダリア園がある雄和華の里前までの約16kmを1時間で結ぶ。秋田にはほんのひと昔前まで、人やモノや文化までもが川で運ばれた時代があったのだ。そんな「ちよと昔の秋田」を偲ぶ船の旅も、なかなか悪くない。川の兩岸にはあじなく、去年9月の豪雨のはんらんのでいでゴミが目立ち、景観的にはやや残念。しかしそれも見方を変えれば、環境問題や自然災害を考える生きた教材であり、あえて見ておく価値もあるかもしれない。また、岸に雪が積もればゴミもあまり目立たなくなる。純粹に船遊びの風情を楽しみたいのであれば、雪のあるうちに一度乗っておくのもいいだろう。

百三十年前に神宮寺から9時間かけて舟で秋田市にたどり着いたバードは、数日滞在した秋田市の印象を「全体として、私は他のいかなる日本の町よりも久保田が好きである。」と著書に記している。彼女が滞在した土地を褒めるのは珍しいのだ。バードのご機嫌を体験できる屋形船での船旅を、大いに楽しみたい。

屋形船の運航は原則として新屋棧橋発 8:30、11:30、14:30
の1日3往復。往復すると折り返し時間を含め所要約2時間
30分。天候や予約状況次第では運休もあるので事前に関
い合わせたい。問い合わせ先 018-824-2777

